

1. 公園緑地における眺望景観とは

1-1 我が国の公園緑地と眺望景観の特徴¹⁾

ここでは我が国の公園緑地を、枯山水や回遊式庭園などのいわゆる「日本庭園」と、オープンスペースとしての「公園」に分けて、それらの成立（歴史の変遷）とその特徴を庭園内からの眺望に係りの深い事項を中心に概説する。

(1) 「日本庭園」の成立とその特徴

歴史的にみて日本の庭園は、概ね自然風景式庭園として発展を遂げてきた。しかしそれは単に自然の風景をそのまま模倣するのではなく、作庭の主題として選んだ風景を理想化し、独特の縮景方法によって自然風景を象徴するようにつくられてきた点に大きな特徴がある。また詳しくは後述するが、日本庭園では古くから庭園外の自然地物を庭の中に取り込む「借景」の技法が用いられており、庭園外への眺望が重要な役割を果たしてきた。以下では時代ごとの日本庭園の特徴を概説すると共に、庭園における眺望の特徴を整理する。

<飛鳥・奈良時代の庭園：仏教芸術と共に中国大陸からもたらされた庭園技術>

記録にあらわれる作庭らしきものの最初は「日本書紀」の中にその記述が見られる。推古天皇 20 年（612）に百済より渡来した芝耆麻呂（しきまろ）が皇居の南庭に須弥山しゅみせんの形くればしと呉橋（屋根つきの橋）を築いたというものがそれである。こうした庭園技術は飛鳥時代に仏教芸術と共に中国大陸から朝鮮半島を経由して我国にも伝わったとされている。

その後、奈良時代に入ると草壁皇子の「島の宮」のように海を模した池を中心として荒磯風の汀等を配して海岸風景を写した庭が作庭された。

<平安時代の庭園：池庭、寝殿造庭園、浄土式庭園>

平安時代になると、三方を山々に囲まれた緑深い京都において、「作庭記（橘俊綱による編纂と言われている）」にみられる技巧を用いながら、周辺の自然に溶け込み、自然に従いながら作庭する庭園様式が確立した。この平安時代に確立した庭園の様式としては、主に以下の3つがある。

①平安初期の池庭：自然の林丘や大池、池の中の島などをそっくり取り込み、その自然的景観の中に人工の立石（景石）を施してその周囲に風致植栽を施した「神泉苑庭園（京都府京都市）」や、中国の洞庭湖を模して京都郊外の嵯峨野に人工の大池を造成して作庭された「大覚寺大沢池（同前）」など。次の時代に完成する寝殿造庭園の前駆をなすものであり、京都の風土を生かした自然順応のおおらかな庭園である。

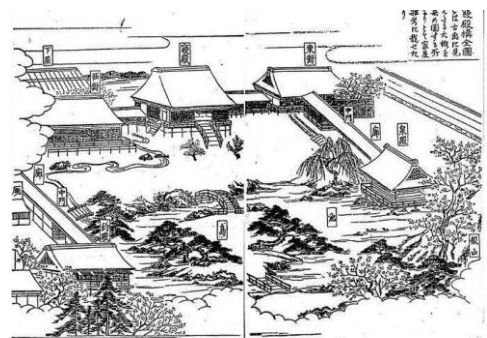


図 1-1 ■寝殿構 関根正直「宮殿調度図解」（1905 年）

②寝殿造庭園：藤原氏一族による摂関政治の最盛期であった平安中期に、上級貴族の邸宅の建築様式として確立した寝殿造の庭園であり、生得の山水や国々の名所を縮景し

たもので構成される。寝殿前方に池を設けることを原則とし、その中に中の島や橋、景石などが配された。典型的なものとしては、かつて平安京にあった東三条殿（現存しない）が挙げられる。

③浄土式庭園：浄土教の思想や信仰の影響を受けた庭園様式であり、極楽浄土を現世に再現しようとしたもの。浄土式庭園の例は多く、遺構としては鎌倉時代作庭のものを含めると、平等院（京都府宇治市）、浄瑠璃寺（京都府木津川市）、毛越寺・観自在王院（岩手県平泉町）などがある。

<鎌倉時代の庭園：夢窓国師の庭>

鎌倉時代に入ると、後鳥羽上皇の水無瀬殿や後嵯峨上皇の亀山殿、西園寺公経の北山殿など、皇室や高位の貴族の離宮には自然地形を利用した寝殿造系の大庭園も造営されたが、一般的には公家勢力の衰退、武家勢力の台頭という社会構造の変化に伴って、庭園は建築と共に簡素化していった。こうした時代の代表的な作庭家が夢窓国師である。

中世最高の禅僧である夢窓国師の足跡は日本全国に広範囲に渡るが、国師は各地で周辺の自然を巧みに生かして作庭を行った。現存する代表例としては、鎌倉の瑞泉寺、甲斐牧の庄（現在の山梨県甲州市）の恵林寺、京都の西芳寺、天竜寺がある。庭園における眺望という観点では、瑞泉寺、恵林寺からは富士山を眺めることができ、夢窓国師は富士山を法身（真理ブツダの本体）とみて作庭にあたったと言われている。夢窓国師の作庭によるこれら日本庭園には、園外に存在する山への眺望というものが明確に意識され、その眺望を考慮して作庭が行われたものと考えられる。



富士山が望める瑞泉寺



嵐山を借景とする天竜寺曹源池庭園

<室町時代の庭園：池庭と枯山水>

室町時代に入ると、上代からの伝統につながる池庭に加えて、禅宗寺院の庭である枯山水が登場する。

この時代の代表的な池庭としては鹿苑寺金閣がある。金閣の庭園は鏡湖池を中心として、大小の島々、諸国から集めた岩、石を配すると共に、園外の衣笠山等の山々を借景

としている点に大きな特徴があり、園外への眺望が作庭のポイントとなっている。

枯山水は、池や遣水などの水を使用せず、石や砂などによって山水の風景を表現する庭園であり、代表的なものに大徳寺大仙院庭園（京都府京都市）や龍安寺方丈庭園（京都府京都市）がある。



衣笠山等の周辺の山を借景とする
鹿苑寺金閣



龍安寺方丈庭園

<江戸時代の日本庭園：回遊式庭園、借景庭園>^{2),3)}

江戸時代に入ると、池を中心としてその周りにいくつかの茶亭・茶座敷などの庭園建築を配置し、それらを有機的に連絡する園路をめぐらし、園路に沿って築山や入江や州浜などを歩きながら鑑賞する回遊式庭園が、公家や大名によって数多く造営された。代表的な回遊式庭園としては、浜離宮、小石川後楽園、六義園（以上東京都）、桂離宮、修学院離宮（以上、京都府京都市）、兼六園（石川県金沢市）、後楽園（岡山県岡山市）、縮景園（広島市）、栗林公園（香川県高松市）、旧徳島城表御殿庭園（徳島県徳島市）などがある。



六義園



浜離宮



縮景園



桂離宮

また上記の回遊式庭園のうち、例えば修学院離宮は比叡山を、後樂園は操山と芥子山（備前富士）を、偕樂園は千波湖を、旧徳島城表御殿庭園は城山をとといったように、庭園外の自然地物を借景しており、江戸時代にはこうした園外にある地物への眺望を特徴とした回遊式の借景庭園が多数造営された。



操山を借景とする後樂園



千波湖を借景とする偕樂園
(楽寿楼より)



城山を借景とする旧徳島城表御殿庭園

また借景庭園は、主に大名が造営した回遊式庭園のみならず枯山水庭園にもみられる。その代表的な例としては、後水尾上皇の幡枝離宮として造営された円通寺庭園、正伝寺（共に比叡山を借景とする）、伊吹山を借景とする大通寺含山軒庭園（滋賀県長浜市）などがある。この中でも円通寺庭園は、後水尾上皇が最も比叡山の眺望に優れた場所を求めて作庭されたと言われている。こうした枯山水の借景庭園では、借景対象とする山の一部を庭園植栽などの見切り要素によって切り取って見せており、この点が、山の全容をパノラマ的に借景する回遊式庭園の借景とは異なる点である。



比叡山を借景とする円通寺庭園

<日本庭園と眺望：「借景」と「非借景」>

これまでに示したように、日本庭園は歴史的にみて自然風景式庭園として終始一貫している。また作庭にあたっては、周辺の自然地形を上手に生かし、庭園と周辺の自然とを一体化するといった手法がとられている場合が多い。こうした事例は、古くは神泉苑庭園等の平安初期の池庭において認められるが、その典型的な技法が園外にある山などへの眺めを自らの庭の中に取り込む「借景」である。わが国の造園学研究の泰斗・上原敬二が「借景とヴィスタ」（造園学雑誌、1926）⁴⁾において「*我國の庭造法が特に借景を以て世界造園史上に特筆されて居る*」と述べていることから分かるように、この借景という技法は、日本庭園を考える上での重要な事項である。

またこうした「借景」という観点から日本庭園の眺望の特徴を整理すると、園外に眺望の対象が存在せず本来的には園内で眺望が完結している場合と、借景庭園のように園外に眺望の対象が存在する場合の2つのタイプがあると言える。日本庭園からの眺望保全を図る場合、園外に眺望対象となる要素があるかどうかによって、その眺望保全のあり方が変わってくるため、この点には十分に留意する必要がある。

①園外に眺望の対象が存在せず本来的には園内で眺望が完結している日本庭園



龍安寺方丈庭園



六義園



浜離宮

②園外に眺望の対象が存在する日本庭園（借景庭園）



後樂園



旧徳島城表御殿庭園



円通寺庭園

(2) オープンスペースとしての「公園」の成立とその特徴

<江戸時代のオープンスペース：眺望の視点場としての「遊覧所」>

我が国における「公園」は、明治維新以降の近代化の流れの中で西欧から輸入されたものであるが、都市の中のオープンスペースという意味では、江戸時代に成立した火除地（両国広小路、上野広小路等）や遊覧所（飛鳥山、御殿山等）がその源流にあたる。

江戸時代は、我が国の人口規模が急激に拡大した時期であり、特に人口 100 万人とも言われる江戸への人口集中は、当時から大きな社会問題となっていた。こうした人口過密の状況下において、江戸には自然発生的にあるいは幕府の政策の結果として、都市内のオープンスペースである火除地（両国広小路、上野広小路等）や遊覧所（飛鳥山、御殿山等）が整備された。眺望という点においては、飛鳥山、御殿山等の遊覧所は、錦絵や名所図会などに描かれている様子からも分かるように、富士山や江戸湾といった園外の自然地物への眺望の視点場にもなっており、江戸時代において既に、都市内のオープンスペースから海や山への眺望が市民に親しまれていた。



図 1-2 ■飛鳥山花見乃図（絵師：広重／「東都名所」に収録）



図 1-3 ■御殿山花盛（絵師：広重／「東都名所」に収録）



図 1-4 ■飛鳥山（絵師：長谷川雪旦／「江戸名所図会」に収録）

<明治の公園：太政官布達公園、洋風近代式公園>

我が国における営造物公園（行政によって整備された公園）は、明治時代以降に開設された。具体的には、明治 6 年（1873）の「太政官布達第 16 号」によって、浅草寺、寛永寺といった寺社の境内や、嵐山、飛鳥山などの古くからの景勝地、遊覧所等を明治政府が公園としたのが始まりである。

太政官布達による公園は旧来からの遊覧所や寺社の境内であるのに対して、洋風の近代式公園として最初に整備されたのが、東京市区改正条例（明治 21 年）に基づいて整備

された日比谷公園（明治 36 年開園）である。

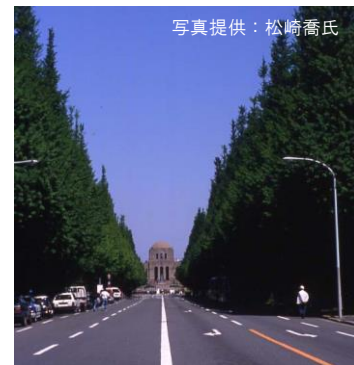


日比谷公園

<大正～戦前の公園：震災復興公園、ビスタを有する公園>

太政官布達による公園の開設、日比谷公園の造営以降、公園の整備はなかなか進まなかったが、関東大震災の教訓を踏まえて震災後は復興局によって、東京の隅田公園、浜町公園、錦糸公園をはじめとして 55 箇所の公園が整備された。

公園からの眺望という観点では、大正 15 年（1926）には明治神宮外苑が造営されたことがトピックとして挙げられる。この明治神宮外苑では、明治神宮造営局主任技師の折下吉延おりしもよしのぶの設計によって、聖徳記念絵画館をアイストップとしたビスタを有する銀杏並木が整備された。西洋のフランス式庭園にみられるビスタを導入した公園としては他に、1914 年（大正 3 年）に完成した旧武庫離宮（須磨離宮公園/兵庫県神戸市）が挙げられる。



写真提供：松崎喬氏

明治神宮外苑 銀杏並木

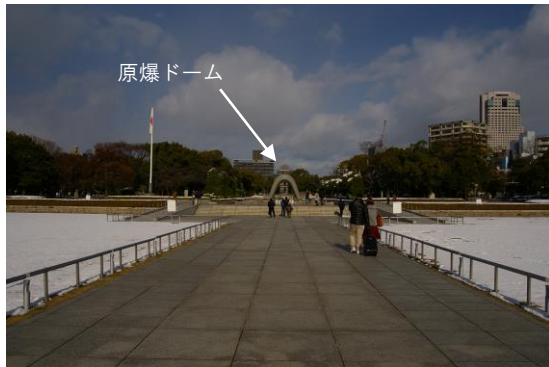


須磨離宮公園

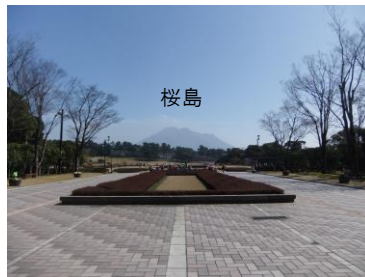
<戦後の公園：戦災復興計画による公園、都市公園法等に基づく公園>

第二次世界大戦後は、東京を始めとして多くの都市で戦災地復興計画が策定され、その一環として公園の整備が進められた。戦後 10 年を経て昭和 31 年（1956）に都市公園法が制定され、その整備が全国的に進められた。また、昭和 43 年（1968）に武蔵丘陵森林公園の設置が閣議決定され、これ以降一つの都・府県を超える広域的な見地あるいは、国家的な記念事業として大規模な国営公園の整備が行われるようになった。

戦後に整備された公園のうち、公園内からの眺望を特に意識して整備された公園としては、園外の要素を眺望の対象とし、その要素へのビスタが特徴的な公園がある。具体的には、原爆ドームを眺望の対象とする平和記念公園（昭和 29 年開園／広島県広島市）や、桜島を眺望する吉野公園（昭和 45 年開園／鹿児島県鹿児島市）、富士山を眺望の対象とする宝野公園・奈良原公園（昭和 57 年開園／東京都多摩市）などが挙げられる。



平和記念公園と原爆ドーム

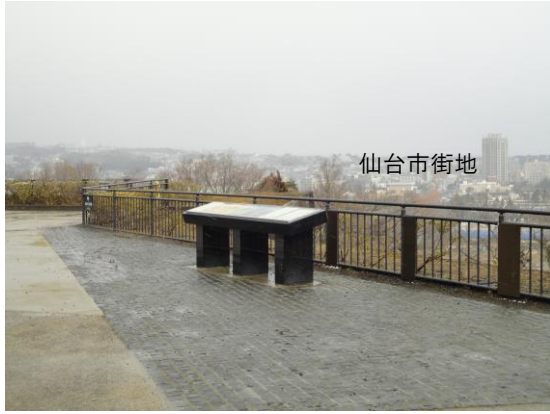


吉野公園と桜島



富士山を眺望の対象とする奈良原公園・宝野公園（通称：富士見通り）

またその他、眺望を特に意識して戦後に開園した公園としては、公園自体が市街地等を望む山や高台に位置し、そこからの俯瞰を楽しむ公園がある。具体的には、仙台市の市街地を一望できる青葉城公園（昭和 28 年開園／宮城県仙台市）、徳島市の市街地を見下ろす眉山に整備された眉山公園（昭和 33 年開設／徳島県徳島市）、中央公園（昭和 45 年開園／神奈川県横須賀市）などが挙げられる。



仙台市街地を俯瞰する青葉城公園



徳島市街地・城山を俯瞰する眉山公園



横須賀市街地・東京湾を俯瞰する中央公園

1-2 公園緑地からの眺望の分類軸と種類^{5)~7)}

前節 1-1 では、「日本庭園」と「公園」の成立ちと特徴を整理したが、これらを公園緑地からの眺望は、「①興味対象の所在」「②眺望の水平方向の広がり」「③眺望の鉛直方向の広がり」という3つの分類軸で整理することができる（下表参照）。

表 1-1 ■眺望の分類軸と眺望の種類

眺望の分類の観点	眺望の種類
(1) 興味対象の所在	(1)-1：興味対象が「園内」と「園外」にある眺望
	(1)-2：興味対象が「園内」にある眺望
	(1)-3：興味対象が「園外」にある眺望
(2) 水平方向の視野の広がり	(2)-1：水平方向に視野の広がりがある眺望（パノラマ景）
	(2)-2：方向性が強く意識される眺望（ピスタ景）
(3) 垂直方向の視野の広がり	(3)-1：ほぼ水平方向への眺望（水平景）
	(3)-2：高所から見下ろす眺望（俯瞰景）

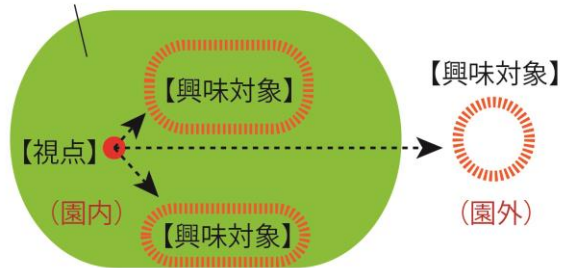
分類軸（1）興味対象の所在

(1)-1：興味対象が「園内」と「園外」にある眺望

「園外」への眺望が意図されて計画・設計されており、公園緑地内からの眺望の興味対象が「園内」だけでなく「園外」にもある場合。本来的に眺望が園内だけで完結していない眺望。

具体事例としては、例えば日本庭園の借景庭園が挙げられる。

公園緑地の敷地



興味対象が「園内」と「園外」にある眺望
＝本来的には園内だけで完結していない眺望



後楽園

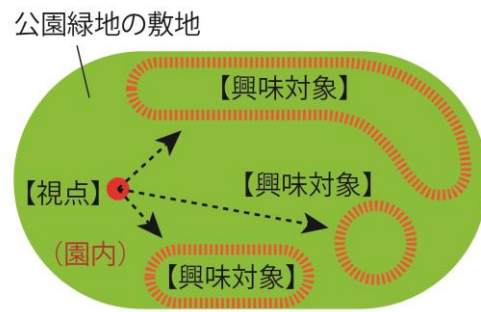


旧徳島城表御殿庭園

(1)-2 : 興味対象が「園内」にある眺望

「園外」への眺望が意図されて計画・設計されておらず、公園緑地内からの眺望の興味対象が「園内」にある場合。本来的に眺望が園内だけで完結している眺望。

具体事例としては、例えば借景をしていない日本庭園等が挙げられる。



興味対象が「園内」にある眺望
= 本来的には園内だけで完結している眺望



旧古河庭園



六義園

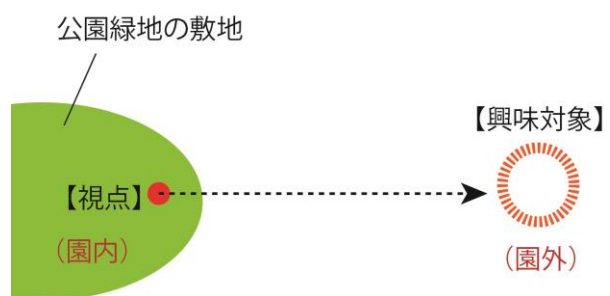


浜離宮

(1)-3 : 興味対象が「園外」にある眺望

主要な興味対象は「園外」にあり、公園緑地は眺望の視点場としての役割を担っている場合。

具体事例としては、例えば市街地や海などを見下ろすような視点場を有する公園緑地が挙げられる。



主要な興味対象が「園外」にある眺望



眉山公園



中央公園

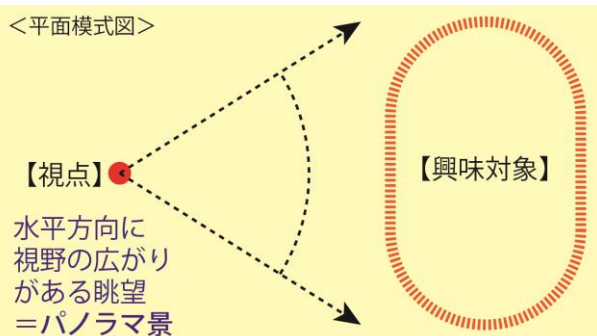
分類軸 (2) 水平方向の視野の広がり

(2)-1 : 水平方向に視野の広がりがある眺望 (パノラマ景)

例えば広い水面や芝生等が目の前に広がっているなど、水平方向にパノラマ的な視野の広がりがある眺望。

江戸時代に作庭された池泉回遊式庭園や明治以降の都市公園等、多くの公園緑地にみられる眺望である。

<平面模式図>



日比谷公園

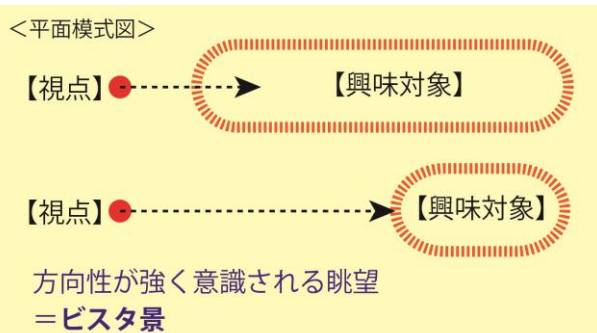


水前寺公園

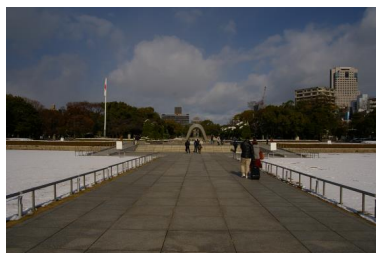
(2)-2 : 方向性が強く意識される眺望 (ビスタ景)

並木が続いているなど、興味対象に方向性がある場合や、アイストップとなるような明確な視対象がある場合など、方向性が強く意識される眺望。こうしたビスタは、歴史的には西洋のフランス式庭園で用いられる手法であり、わが国の伝統的な日本庭園にはみられないタイプの眺望である。

<平面模式図>



吉野公園



平和記念公園



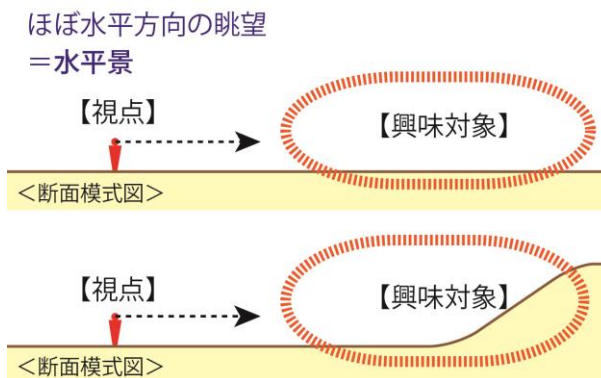
須磨離宮公園

分類軸 (3) 垂直方向の視野の広がり

(3)-1 : ほぼ水平方向への眺望 (水平景)

ほぼ水平方向に興味対象への眺望が得られる場合。

日本庭園内の園路から池方向や築山方向への眺望、公園緑地から近接する建造物や遠方の山岳への眺望などがこれに該当する。



縮景園



浜離宮

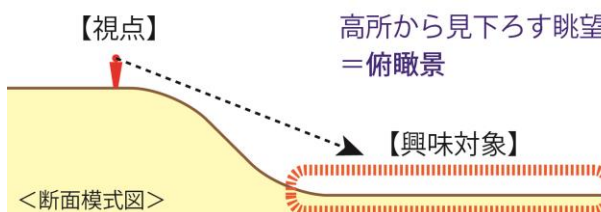


清澄庭園

(3)-2 : 高所から見下ろす眺望 (俯瞰景)

高所から俯瞰する眺望。

日本庭園内の築山や建築物からの眺望や、高台に位置する公園緑地からの眺望がこれに該当する。



偕楽園 (楽寿楼)



眉山公園



中央公園